

俺の彼女が何人もいるのだが。

月島柊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大学を卒業した5人。しかし百合花と終には意外な過去が・・・

# 目次

第1話	写真	1
第2話	西条	4
第3話	妹	9
第4話	出会い	14
スペシャル編	バイク	18
第5話	仮想世界	21
第6話	猫化	26
第7話	彼女	31
第一長編作品	第8話	34
	最終話	
	赤い空	

## 第1話 写真

「はあ・・・」

大学を卒業した当日。何でため息をついてるかって？それは・・・

「柊くんっ♪」

「帰ろ。今日はどの家いく」

「わっ、私の家でもいいのよー!」

「柊! 僕の家じゃないのか!」

最後の奴だけ特徴的なのはおいといて、全員女子。正確には、俺の彼女、だ。

「別に誰の家だっていいだろ・・・」

俺の名前は月島柊。傍から見ればハーレム状態だが、俺からしたら悩み事だ。おっと、こいつらの紹介がまだだった。

最初に言ったのは西宮紗由理。

つぎに言ったのは姫宮結菜、

さらに言ったのは白水百合花、

最後に言ったのは西条咲希。

合計4人。それぞれ順番にデレデレ、おっとり、ツンデレ、僕っ子。

実際西条に言うと「子供じゃない!」って言われるが。

呼び方は紗由理、結菜、百合花、西条。名前で呼んだり苗字で呼ぶ奴もいる。

さて、「誰の家に行く」のところだが、大学の時から4人の誰かの家に泊まっていた。週4で誰かの家に、週3で自分の家。自分の家の方が少なかったのはともかく、今日は土曜日。前までなら自分の家に行ったが、今は1人で暮らしのため土曜日でも誰かの家に泊まることになっている。

「それで、誰の家にするの」

百合花だ。まずそこから始まる。百合花の家は結構マシだ。そんなに気まずくないし、1人暮らしだから。心配ってのもあるし。

「百合花のところかな。明日は西条の家でも行くか」

「そっかー。じゃ、明日な」

西条はそんなにショックを受けない。以外と天然だし。

百合花の家に着いた俺はいつもの百合花の部屋へ案内される。

「ん？」

いつも棚です見ないのだが、見てみると百合花と誰かが写った写真が飾られていた。ちゃんとフレームに収めてある。

「これって……」

「っ！」

百合花が慌てて隠す。すると棚に百合花の足が当たってその写真が落ちてくる。

「百合花！危ない！」

俺が写真が落ちないように持つと、ちょうど表になって持っていた。

それは百合花と俺で行った遊園地の写真だった。俺たちが高校2年の時に行った遊園地だった。もう5年前なのにきれいに飾っていた。このときは、まだ……

【白水百合花視点】

私が写真を取り返そうとすると、柊くんが写真を見たまま目から水を流していた。それは目薬でもなく、涙だった。

「……柊くん？泣いてるの？」

「えっ、」

気付いてなかったのか柊くんは目に手を当てる。

「……本当だ……なんで、俺、泣いてんだ」

「……」

私は何で泣いてるのか分かった。4年前、高校3年の時、私と柊くんはある人に引き剥がされた。高校も別にされ、全く縁がなくなってしまう。そのちょうど1年前……

「百合花……」

「柊くん！」

私は抱きしめた。

「大丈夫。今はちゃんというから。安心して」

「百合花っ！」

こうしたのは8年ぶりだろうか。最後に抱き合ったのは。これも、全部あの女のせい・・・

## 第2話 西条

百合花の家に泊まっている最中俺は、百合花とトークを楽しんでいた。まだあの事は忘れてないが。

「お前って、妹いないのか」

「いるけど、もう別居してる。私の方が引っ越したんだけどね。そう言う柊くんは妹とかいないの」

「弟がいるけど、高校3年だし、妹は行方不明だし」

行方不明になったのは2年前。俺が大学から帰ってきたとき、同居してる筈なのに家にいなかった。それから実家にも連絡したが、来ていないと言っていた。それから妹と俺は一切会っていない。たしか2年前は高校3年だったから、今は大学2年か。どんな顔してるのかな。

「可哀想だよね。名前なんだっけ？」

「ああ、咲良だよ。どんな顔してるんだろうな」

夜になり、俺が床に寝ようとすると、百合花が手招きをする。

「こっつ、こっつ来てもいいよ?」

「狭くならないか」

「柊くんとなら・・・ううん、どうってことない」

最初の「柊くんとなら」ってのが気になったが、俺は百合花がいるベットのの上上がる。

「くっついてると暖かいな」

3月とはいえ結構寒い。夜なのもあるかもしれないが、多分17度くらいだろう。

「寒くはない・・・」

「ならいい。」

どっちが暖かいのか分からないが、明らかに百合花が熱い。

「百合花、熱くなってないか」

「熱くなってない!もうっ、おやすみ!」

照れ隠しなのか早く強く言った。俺は明日行く西条に電話する。

《なんだ?柊》

「明日どこで待ち合わせる?」

《そうだな、駅前だろう》

「そっちがいいんだっいたらいいけど」

《じゃ、明日の7時半に駅前広場な》

「分かった。それじゃ」

電話を切った矢先、欠伸をする。もう寝るか。

翌日、俺は百合花と別れ、昨日話した駅前の広場へと向かう。通勤時間帯だからか、サラリーマンが駅に流れていく。

その中で1人、手を振っている少女がいた。

「おーい、柊!ここだ!」

「西条!?!」

俺は走って向かい、西条の口を塞ぐ。

「何叫んでるんだ、目立ってるから」

「どうして?分かるようにしたんじゃない」

相変わらずなのか?いつもこういう性格だからもう慣れた。

「はいはい。ほら、行くぞ」

何回か行ったことがあるから場所は分かる。バスに乗って15分くらい。

「あそこのバスだね。」

バスはまだ来ていなかった。しかし、結構な列は出来ていた。俺と

西条は後ろに並んだ。

「どうしてここを待ち合わせ場所にしたんだ」

「どっちも近いから。僕は百合花の家まで行っても良かったんだけどね」

「さすが運動少女だな」

西条は昔から運動が好きで、陸上大会でもベスト5に入ってくるような成績だった。

暫くして、バスがやって来た。前から順に乗っていくが、席は全部埋まってしまった。それから俺の順番まで立ち客が増えていく。

ようやく乗れたのはドア付近まで客が来てから。どうにか乗れたが、後ろからも乗る人がいるから奥の方へ詰める。

「西条、キツくないか」

「大丈夫。もつと詰めたら？」

俺は壁に西条を押し付けるようにしてとどまった。

「近いね・・・」

別人のように態度がいつもと違う。

「・・・うわっ」

可愛いから見とれていると、後ろから押されて手が柔らかいものについてしまう。柔らかいものって、まさか！

「んひゃっ」

「ごっ、ごめん！すぐどけるから——」

どけようとする俺の手を西条が押さえる。

「後ろキツイから大丈夫。僕も平気だから」

「そうか・・・」

結構胸が大きい人には触れなかったが、今思い知らされた。Hカッブはあるか？

「私すごいドキドキしちゃってる・・・」

「私って、僕じゃなかったのか」

「うん。高校生の時なんだけど、可愛くないって言われて、一人称変えたの」

「なんだ、元から可愛いのに」

「かつ、かか可愛い!？」

咲希がすごい動揺してる。自信がなかったら当たり前か。

「可愛いよ。咲希」

「むーっ、だったら・・・」

少し間を開けて咲希が言った。

「んっ、キス、できるでしょ」

緩くどがらせた唇を上に向けてキスを迫る。

「キスって・・・」

「出来ないんだったら可愛くないでしょ？」

しなきゃいけない気もするけどしなないといけない気もする。可愛くないって思われてしまうと困るし・・・俺は少し考えて決断した。俺

は・・・

「ちゅっ」

キスすることにした。咲希は驚いた顔をしていたが、すぐに目を瞑った。

「ん、んんっ」

キスしていると、降りるバス停のアナウンスが聞こえてきた。もう終わりだ。

「咲希、降りないと」

「この手はどかす？」

当たり前だ。人の胸を揉んだまま外に出れるか。

「そりやあどかす。」

「わかった。降りよ」

バスから降りると、すぐ目の前に咲希の家はある。あれ？そういえば俺のバイクどこ置いたっけ？

「ああああっ！」

「ど、どうしたの！柊くん！」

俺は百合花の家にバイクを置きっぱなしにしてしまっていた。キーもかけっぱだし、すぐ帰れないな。

「バイクを百合花の家に置いてきた・・・」

「あらら。ま、今は楽しも？」

「ああ。そうだな」

家に入り、かけてあったテレビを見ると、誘拐された人の映像が流れていた。そこには俺の映像が流れていた。俺が誘拐されていないんだから、まさか・・・

「月島咲良さんは今も誘拐犯に誘拐されています」

俺の妹、咲良だった。誘拐されてるって、知れただけいいけど、どうすればいいんだ。そう考えていると、百合花から電話がかかってきた。

《柊くん！咲良のニュース、見てる？》

「ああ。見てるよ。」

《助けに行かないの、行くべきなんじゃないの》

「柊くん！結菜ちゃんから電話！」

咲希がスマホを渡してきた。

《柊くん、今は柊くんの思ってることを押し通して。私たちのことはいいから、自分の思ってることを。》

「分かってる。」

《だったら今は何してるの。なにもしてないんだったらそれが思ってることなの。》

「思ってること・・・」

《私たちのことは考えないで。》

「・・・分かった。ありがとう、結菜」

《大丈夫》

俺はスマホを咲希に戻すと、百合花の電話に出る。

「俺、咲良を救いにいく。」

《そう。行ってあげれば》

「じゃ、切るからな」

そう言って切り、咲希に言う。

「行ってくる——」

「行ってらっしゃい。気を付けてね」

「・・・ああ！」

### 第3話 妹

咲希の家を出た俺は、咲良を救うため一旦駅前へバスで向かう。百合花の家にバイクを取りに行かないといけないからだ。

駅に着いた俺は百合花の家まで歩こうとする。バス停から少し歩くと、後ろから俺を呼ぶ声がした。

「柊くん！」

百合花だ。ふりかえると、俺のバイクにまたがって乗っていた。

「百合花、バイク乗れるのか」

「免許はあるし。キー掛けっぱなしだったからね。それより、早く行ったら。妹救いに」

「ああ。行ってくる」

ヘルメットを被り、駅を出ていく。バックミラーに手を振る百合花が見えた。絶対、救ってちゃんと紹介する。そう俺は決めた。

自分の家に着くと、弟の暁依あきよりを呼ぶ。

「暁依！行くぞ」

「柊、何で行くんのだ」

「バイクでいいだろ。2人乗り用だし」

場所は車で15分。バイクでも15分だろう。

場所は数年前に閉院した病院だった。辺りからは苔も生えていて、今にも崩れそうだった。

「ここにいるんだな」

「姉ちゃんを救う、そうだろ」

暁依が自信を持った声で言った。

「よし、行くぞ」

1歩中に踏み入れると、湿った空気が出迎えた。どこかに水があるんだらう。

「2階行ってみようか」

1階はほとんど壊されている。階段もないため周りの岩などから2階に昇る。

「咲良・・・どこにいるんだ」

「柊！あれ！」

暁依が指を指す。指した先を見てみると男1人と咲良の姿があった。

「ん？なんだあれ」

何か細長いレバーのついた物体があった。近づいてみると、それは……

「爆弾か!？」

「自分も犠牲に吹っ飛ぶ気か！」

レバーはゆっくり開いている。完全に開き切ったら爆発だ。

「咲良の縄をほどこう」

「分かった。暁依は爆発解除を狙ってくれ」

俺は咲良のところへ走る。

「咲良、もう大丈夫だからな」

「どうして、助けるの。ずっと会ってないのに」

何言ってるんだ。妹は俺のものだ。

「会ってないとか関係ないだろ。妹は妹だ。俺だけの」

「……妹……」

「そうだ。2年、5年会ってなくても妹だ」

話ながら縄を切ろうとしているが、中々切れずにいた。このままじゃ間に合わない。

「柊！この爆弾解除出来ない！」

「だったらこっち来い！切るの手伝え！」

2人がかりで縄を切る。ほんの少しずつ削れていってるが全く切れそうにない。

「暁依、避けて」

俺は内側にナイフを当て、力づくで縄を切る。

「切れた！」

カチッ

爆弾のレバーが開き切ってしまった音がした。

「暁依！先逃げろ！」

「柊は」

「咲良を守る！早く逃げろ！」

暁依が逃げると俺は咲良を抱き寄せる。

「このまま逃げるぞ」

「うっ、うん」

ゆっくり逃げていると、ついに・・・

ドンッ！

爆発した。もろに浴びることはなかったが、爆風で飛ばされる。俺は咲良を内側にして、床に咲良を打ち付けないようにする。

「ぐっ」

俺が代わりに打ち付けられた。

「お兄ちゃん！」

「咲良、大丈夫だったか」

「私は平気。お兄ちゃんは」

「俺も少し痛いだけだ。ほら、外出るぞ」

暁依が外にいるはずだ。俺は手を繋ぎ、2人で外に向かう。

「柊、遅いぞ」

「すまん。バイクは誰が乗ってく」

「柊と姉ちゃんに乗ってけばいいだろ。」

「けどそれだと暁依が歩いて帰る羽目になるぞ」

家まで歩いて1時間はかかる。

「大丈夫。姉ちゃんと帰っとけって」

「お兄ちゃん、嫌？」

「嫌じゃない。じゃあ帰ろうか」

俺はバイクから1つのヘルメットを出す。

「そのヘルメット・・・」

「ああ。お前のだよ。咲良」

咲良はヘルメットを持って俺を見つめている。

「なんだよ、咲良」

「なんでもないっ」

そう言ってヘルメットを被る。俺はバイクにまたがり、後ろに咲良を乗せる。

「しつかり掴まってるよ」

「うん」

俺はバイクを走らせる。家へ向かって60キロで走っていく。

家についた俺たちはテーブルを囲んで2人で話していた。

「大学は俺が通ってたところだったらしいってよ」

「うん。ありがとう、お兄ちゃん」

大学までは電車で20分。そこまで遠くはないが、結構疲れる。

「明日からだっただけだから、頑張れよ」

「はい」

もうそろそろ出るか。

俺はバイクを走らせる。今日はちよつと遠出だ。どこに行くかつ

て?それは咲良の大学だ。一応俺も卒業生ではあるけど。

大学に着くと正門の柱で咲良を待つ。1人の女子大生が一瞬俺を

見て、すぐに仲へ戻っていく。何が起きたんだ?まあいいか。

【月島咲良視点】

私の友達がもう一回戻ってきて私に言った。

「咲良ちゃん、あそこに男の人いるんだけど、もしかして・・・」

「?」

男の人?私特に知らないんだけどな。お兄ちゃんが来るはずない

し。って、

「ええっ!?!」

「よ、咲良。迎えに来た」

後ろで女子たちがキャーキャー言ってるけどなんか期待を裏切り

そう。

「咲良ちゃん咲良ちゃん、この人誰?」

ワクワクした声で言ってくる。裏切りそうだけどしょうがないよ

ね。

「ああ、彼氏とかじゃなくて、お兄ちゃん・・・」

「お兄さん!?って、よく見たら・・・」

「な、何ですか」

お兄ちゃんが戸惑った感じにいる。

「ちよつと、やめてよ——」

「月島終さんですか！」

何で知ってるの?と思ひながら私は聞いていた。

「はい。そうですけど」

「校内にポスター貼ってありますよ!4人の女子に狙われてるって」

「ああ、確かにそうだな。君の名前は」

「葉月彩芽です。」

自己紹介まで済ませてもう仲良くなったの?早くない?

「あとでまた会おうな。咲良、乗れ」

「あつ、う、うん!」

「それじゃあ、月島さん、また」

## 第4話 出会い

家に帰った俺たち2人は自分の部屋に向かっていた。もちろん誰も来ない前提で。そう思っていると呼び鈴が鳴った。

「はい」

「柊くん！遊びに来たよ！」

「柊くん、入れて」

「ハイハイ」

ドアを開けて4人を中にいれる。平日に遊びに来るってどういう神経してるんだこいつらは。

「おっじゃましまーす」

「はしゃぐな」

「柊くんを中に部屋どこ。私行く」

結菜が俺の部屋を聞いてきた。まだ早い気がするんだが。

「お兄ちゃん、お茶でも出しとくね」

「ああ、よろしく」

「妹？」

紗由理が聞いてきた。

「ああ。義理なんだけどな。かわいいからいいんだが」

「じゃあ私たちとどっちがかわいい？」

来たよ恋愛争奪戦。5人のうち誰が一番かわいいかってことだろ。そりゃあ咲良……って言っちゃダメなんだろうな。

「みんなかわいいんだけど」

「1番は！」

「私」

結菜が言う。結菜もかわいいんだけどなあ

「咲良かな……」

「やっぱり妹かあ。」

「ふにやっ！」

咲良が変な声を出す。

「動揺しちやってるの」

百合花が咲良に言った。

「そりやあ1番って・・・」

「柊くん、妹動揺させちゃってるよ」

「いや知らん。しかも選べって言ったの紗由理だし。」

「かわいい・・・お兄ちゃん・・・」

「ああああ悪かったな動揺させて」

「かわいい・・・!」

「咲良さん?」

1人でかわいいと呟いている。

「はい!どうしたのお兄ちゃん」

「なにかわいい呟いてるんだ」

「だって私がかわいいって言われたから」

「かわいいのはダメなのか」

少し決め台詞のように言った。

「むにゆうう・・・くちゅん!」

「くしゃみ呟か?」

「くしゃみ呟したのか」

「聞かないでー!」

「こうだからかわいいんだよなー」

「俺は部屋で寝てるから。5人でトークでもしてな」

「はーい」

【月島咲良視点】

お兄ちゃんが2階に上がる、私たちはお兄ちゃんをめぐって話し合っていた。

「咲良ちゃんは柊ちゃんと結婚したい?」

「できるんだったら」

「けど血繋がってないんでしょ?」

「調べてみるね」

3人が協力して調べてくれている。出来るのかな。

「親の再婚で義理の兄妹となった場合は結婚できるってさ」

「ホントに!」

「つてことは私たちのライバル」

ライバル? どういうこと?

「私たちも柊ちゃんと結婚したいんだよね」

「だからね・・・」

私もみんなに負けないようにお兄ちゃんの気を引かなくちゃダメってことだよ。次の休日デート誘おうかな。それで一気に上がるはず・・・!

「咲良ちゃんの誕生日っていつなの?」

紗由理ちゃんが聞いてきた。

「誕生日? 12月17日だけど」

「私の誕生日に近い! 私12月23日なの」

偶然! こういう偶然は反応してしまおう。

「誕生日パーティーも5日違いでできるね!」

「そうだね! やろやろ!」

すっかり意気投合した私と紗由理ちゃん。いつも馴染めない私ももう仲良くなった。

「私たちも参加するの」

「したかったらでいいんじゃない?」

百合花が言った。無理にとは言わないから強制ではない。

「私に行く。」

結菜はやっぱり行くそう。だ。

「じゃ、じゃあ私も!」

こうなったら参加せざるを得ない。ここで断ったら空気が重くなるだろうし。

「5人は参加ね。柊くんは」

「私が誘つところか」

私は妹だし誘つとくことにした。

「私、12月3日なんだけど」

「じゃあ有希ちゃんも! 楽しそうじゃん」

みんなでワイワイしていると、時間はあつという間に過ぎていた。(時間見てみて) 17時に始めたはずが今はもう18時。そろそろお

兄ちゃんも起きてくる時間だ。

そんなことを思っているとキッチンからいい臭いが漂ってきた。

「誰が夕食作ってるの」

「弟の暁依が作ってるの。おいしいのよ」

私は暁依を紹介した。

「食べてく?」

「いいの?」

「もちろん!」

「じゃあ、食べてこうかな」

4人は家で食べてくことにした。

私は暁依のところへ向かう。

「暁依、4人分できる?」

「オツケー、姉ちゃん」

【月島終視点】

18時になって起きると、1階からいい臭いがしてきた。多分暁依だろう。暁依は料理が好きで朝食、昼食、夕食共に作ってくれる。所謂「イクメン」ってやつだろうか。

1階に降りるとやっぱり暁依がキッチンで夕食を作っていた。

「おつ、暁依、もう作ってるのか」

「4人ぶん追加されたけどね」

「ごめんね?」

咲良が手を合わせて謝っていた。

「何で追加したんだ」

「4人が食べてくんだって。」

あいつらも食ってくのかよ。

「まあいいか。それじゃあ俺は先戻ってるからな」

## スペシャル編 バイク

大学からの帰り、バイクで後ろに咲良を乗せて俺は走らせた。50分くらいかかるから結構遠い。

「電車の方が速いのにどうしてバイクで来たの？」

「会いたかったから」

咲良になるべく多く会っておきたかったからバイクを選んだ。

「そんなに会いたかったの」

「会えないのは悲しい。それだけ」

喋り方が結菜に似てきたな。悪い影響か？

「あとは？理由まだあるでしょ」

「・・・」

俺はコンビニにバイクを止めた。

「なんでそんなに聞くんだ」

「だって私に好意抱いてない？」

好意・・・バレてたのかよ。告白するんだったらするけど義理だけ

ど妹だから結婚はな・・・

「お兄ちゃん、好きなんだったら言つてよ」

「そんなんじゃない。ただ前みたいになってほしくないだけだ」

「そう・・・」

俺はまたバイクを走らせる。まだ40分近くある。

咲良は今まで椅子に捕まっていたが、コンビニを出てから俺に抱きつくように捕まっている。

「咲良、む、胸が・・・」

「だって離れたくないんでしょ」

少し大声になって言った。走っているのだから小声だと聞こえない。

「そういう意味じゃないよ！」

「運転に支障がないようにするから」

「はあ」

そういう問題じゃないんだけどな。

そのまま20分走っていた。一般道だから結構遅い。車だったから高速乗っていけるから速いんだけど。

「遠いー!」

「車で来ればよかったのに!」

「駐車場停めるの面倒くさいじゃないか!」

速いけど面倒くさい。そういうのが俺は嫌いなんだ。

「面倒くさがりやさん!」

「うるさいな! いいんだよ!」

相変わらず大声になる。声が勝手に小さくなるせいだ。

家まであと5分のところにあるコンビニに寄り、飲み物を買う。

「何がいい。咲良!」

「うーん、これ!」

指したのは炭酸だった。

「あのなあ、腹膨れるぞ!」

「お腹空いてるんだもん!」

何でもそう言えばいいんじゃないんだけど。

「俺はお茶でいいや。ほら、帰るぞ!」

セルフレジで買い、外に出る。

「かえるかえるー!」

かわいいしなんか抱きつきたい。抱きついたら怒られるけどね。

こんなところだし。

「ぎゅーっ!」

そっちから抱きつくなよ。こっちが我慢してたんだから

「いいのか抱きついて!」

「何となくだったら大丈夫!」

大丈夫じゃないから言ってるんだ。けどなんか肌が柔らかい。

ずっと抱きついてたい。

「柔らかいな!」

「ピチピチって言って!」

「はいはい。ピチピチだな」  
「にゅーっ！」

子供みたいにはしやぐ。そこがかわいいんだけど。30秒は抱きついたらまだった。

## 第5話 仮想世界

俺は配膳を手伝い、4人のもとに行く。回鍋肉とか結構難しい料理料理を作っていた。

「ほら、できたぞ」

「美味しそう!」

「それは、ありがとうございます」

暁依もちゃんとお礼を言う。俺は咲良の隣に座り、回鍋肉を頬張る。

「お兄ちゃん、ああん」

咲良が持っていた箸を俺の口に向ける。俺だって自分で食ってるんだが、なにか理由が・・・あつ、もしかして好きなのバレてるから？

俺は口を開けて箸を待つ。暫くすると肉が俺の口に入ってくる。

「ん?」

味に異変があった。まあ気のせいだろう。

「お兄ちゃん、美味しい?」

美味しくはないが。

「美味しいよ」

「この回鍋肉美味しい!」

ってことは俺だけか。何で俺だけ?すると意識が急に遠くなる。

「柊くん!」

俺が起きた時には咲良の寝室に寝かされていた。暁依もいるかと思っただが咲良しかいなかった。

「咲良?みんなは」

「4人は帰ったよ。暁依は夕飯の片付け」

みんな俺のことは?と思っていた。

「みんな俺の心配はしないのか」

「私は心配したよ。お兄ちゃん」

そりゃあそうだろう。犯人なんだから。

「なんか入れたんだろ」

「ううん、入れてないけど」

「え？じゃあ何で」

「それより元気になったんならお兄ちゃんの部屋戻れば？」

鋭い言葉のナイフ。ついに咲良も言い出したか。俺はすぐ立ち上がり、自分の部屋に向かう。

自分の部屋に来た理由は久しぶりに仮想世界に行ってみようと思いい、早速魔法をかけた。

仮想世界に降り立った俺は首都の真ん中に転移した。俺が泊まっていたホテルも変わり、町も明るくなっていた。俺はある路地裏に向かう。俺がよく行っていた武具店だ。

「いらっしやい。って、柊か！」

相変わらず野太い声が響く。

「久しぶりだな、ギジル」

「2年くらい来てなかったろ。成人式の時以来だろ」

いかにも。成人式をここでした以来来ていなかった。

「そういえば、ホテルも契約新しくなってたぞ。見に行くといい」

「ああ。じゃあな、ギジル」

俺は手を降って武具店を出る。

また町の真ん中に戻ると、女の子がぶつかってきた。気の悪い人だったら「なにやってるんだ！」とかぶちギレそうだが俺はそうじゃない。

「ごっ、ごめんによさしいー」

「いやいや、大丈夫だよ。急いでるのかい」

見た目初心者だ。ケットシーかな？猫耳がついてるし。あと、胸がすこしデカイ・・・って、何見てんだ！

「はい。ホテルに行きたいんですが、分からなくて」

だったら俺も丁度行くところだ。今ホテルに行くのは俺みたいに契約更新されているか新しく来たかだろう。

「だったら俺も行こう。丁度行くところだったし」

「はい。お願いします」

2人で歩き出す。ホテルは中心から北東だ。

ホテルについた女の子は部屋に向かって歩く。俺はロビーに契約更新を聞きに行った。

「204号室です。2人相部屋なのでかなり広いですよ」

相部屋？いない間に随分変わったな。2年前は相部屋なんてなかったのに。

階段を上がり2階の奥に204号室はある。2人部屋は奥に固まっている。俺はノックして部屋にはいる。

「失礼します。あれ？」

そこにいたのはさっきいたケットシーの女の子だった。

「あつ、あなたが柊さんですか」

俺の名前を知ってるそうだ。

「はい。どうして知ってるんだ」

「強い人とレベリングしたいって言ったら柊さんがいいって言われて」

なるほどそういうことね。確かにこの仮想世界で2番目だけど。

「じゃあレベリング行くか？」

「いいの!?!いくいく!」

元気よく言う。レベリングくらい余裕だからどうってことない。ただ、武器はあんまり持たない。魔法でほとんど解決してしまうから。

フィールドについてから女の子の武器を確認する。片手剣1本だった。

「お前、片手剣1本で大丈夫か。予備くらい持ってくればよかったのに」

「うん。だって新品だから。あと、お前って呼ぶのやめて？」

呼ぶなも何も、名前知らないから呼べるはずない。

「名前なんなんだ」

「ミサ。そう呼んでもらっている。柊さん」

「だったら俺も呼び捨てでいいんだが」

「ううん、柊。なんか呼びづらい。柊くんがいい？」

周りからもそう呼ばれてるし違和感はないか。

「いいよ。ほら、敵だ」

ミサ片手剣をレイピアのように持つ。そのまま突っ込むが弾かれて終わる。

「ミサ、下がれ」

俺はそういつて上位の火炎魔法を使う。炎は火柱になって敵を囲む。炎が消えたときには敵は消えていた。

「すごい…魔法は転移魔法くらいしか普通覚えないうって聞いたのに」  
確かに魔法は普通来るための転移魔法しか覚えなないのが普通。けどいろいろ覚えてるとやりやすいし。だから覚えている。

「まあな。無理して覚える必要はない。あと」

俺はミサの片手剣を持つ。

「持ち方がレイピアみたいになってたな。」

「普段からそうしてるけど」

「普通に下に持っていていいんだよ」

俺は手をまわして持ち方を教える。

「慣れなかつたら右手を上にして両手で持ってみて」

「こうかな?」

「そうそう。そのままこのスライム斬ってみようか」

俺はそこら辺にいたスライムを指差す。

「そのくらいだったら倒せるよ」

「倒すのが目的じゃないからな。持ち方の練習だぞ」

「分かってる!」

ミサは正しい持ち方でスライムを斬る。レベル1だからすぐ倒せる。

「その持ち方で練習してみようか」

「はい!」

耳がピクツと動く。猫耳だからやっぱりよく聞こえるのかな。

「あっち、でっかいモンスターくる!」

「でかい?」

俺は魔法をためて待っていると、そこから来たのは誰も倒した事のないモンスターだった。俺も何回か戦おうとしたが、全て負けてい

る。しかも逃げられない。

「はあっ！」

上位火炎魔法を使うが全く倒れない。俺は風魔法も使う。しかし弾き返しこつちに攻撃がくる。俺は結界魔法をつかってミサを守る。

「うっ」

「柊くん！」

結界越しに叫んでいる。

「はああっ！」

水魔法を使う。全く倒れない。するとミサが結界を破り外に出て、剣で急所を突く。

「ミサーあぶな——」

しかし余裕で倒してしまふ。

「ミサ、強いじゃんか！」

## 第6話 猫化

「はあっ」

ミサもたくさんの敵を倒し、気づいたらレベル50まで上がっていた。俺のレベルは1790だけど。けど1790に少し近づいた。これで結構強い敵も倒せる。

時間を見ると20時50分。もう夜だった。

「次で最後にしよう。」

「うん！」

最後の敵を倒すとミサが俺の手を掴み、一緒に転移する。転移したあともミサは手を離さない。

「ミサ、どうかしたか」

「あつ、あの！り、リアルで会いたんだけど、いい？」

「リアルで？いいけど、明日でいいかな」

「うん！えつと、7時半駅前でいい？込入の」

込入って俺の家から歩いて5分くらいのところか。ってことは家も近いのかな。

「ああ。俺の家から近いし」

「そうなんだ！じゃ、また明日リアルでね！」

リアルか。この世界も今は結構な人数がいる。2年前は数千人だったのが今は数千万人にまでなっている。

家に戻った俺は歯を磨き、風呂に入る。

(明日か。どんな人だろうな)

そう思っているとドアが開き、風呂に誰かが入ってくる。

「へ？」

「にゅっ！」

咲良だった。さすがに思春期なのだからビンタとかされるだろうな。

「なあんだ、お兄ちゃんか」

「なんだその言い方。晝依は嫌なのか」

「好きな人の方がいいでしょ？」

少し安心。ビンタされなかつただけいい。けど両方裸だから全てが見えている。特に咲良。俺は風呂に入ってるからいいけど咲良は立ってる。

「なあに、どーこ見てんの」  
「……………」

俺は何も発つさなかつた。以外といつも一緒に風呂入らないから気づかなかつたが咲良の胸に少し血がついている。

「咲良、胸の血ってなんだ」  
「っ！」

見られちゃマズかつたのか驚いた顔をしていた。

「これ、お兄ちゃんが仮想世界行ってる時に誘拐されてたときの仲間が来て注射器刺されたの」

「体に痛みはあるか」

「毒が入ってるらしくて、でも何も変わったことないの」

毒が入ってるって、結構大惨事だ。どうにかして毒を抜きたいがどうやって抜くか。吸い出す、でもどうやって。注射器で吸い出すのは痛いだろうし俺もそこまで知識はないし、最悪血まで抜いてしまうかもしれない。そうすると貧血になってしまう。

「お兄ちゃん、なんかめまいがする……………」

「咲良、どうやって吸い出したらしい」

「何でもいから、とにかく抜いてっ」

「何でもいって……………」

「っ！」

俺は今いる場所を思い出した。風呂なんだから俺が毒を吸っても吐き出せる。

「咲良、毒を俺が刷ってもいいか？」

「胸を吸うの？別にいいけど」

「わかった。いくぞ」

「うん。」

俺は咲良の胸に顔を近づけて乳首の横にあつた傷跡を吸う。確かに血の味もするがたまに変な味もする。これが毒か。

吸って吐き出すを繰り返して、やがて味がしないところまで来た。俺は念のためもう1回吸う。なにか出っ張っているものを吸う。腫れたのか。

「あんっ」

俺は咲良の喘ぎ声に疑問を持った。

「お兄ちゃん、乳首はらめえ」

「っ！」

乳首を吸っていることに今気づいた。

「ごめん！」

「赤ちゃんみたいだった」

毒を抜いたら性格は戻るのな。なんか残念だった。

俺は咲良を風呂に入れ、ゆっくりあがり、自分の部屋で休んだ。明日にミサと会うから。

「柊、ちょっといいか！」

暁依が部屋に入ってきた。

「どうした、暁依」

「姉ちゃんの体調が！」

姉ちゃんの体調調べて、さつき毒は抜いたはずなのに、何で体調に問題があるんだ。

俺は咲良の部屋に行くのと寝込んでいる咲良の様子を見た。とてもうなされていて顔色も悪い。

「咲良、大丈夫か」

「おにい、ちゃん・・・」

話すことも難しいのだろう。途中で区切ってしまう。

「咲良、無理するなよ。」

俺が撫でると頭に獣のような柔らかい毛皮みたいな感触があった。

「なんか猫みたいないな感触はないか」

「どれ。」

暁依も咲良を優しく撫でる。

「確かにするな。」

「ううううっ・・・」

苦しそうだ。しかし人間にはない感触。普段はしないのに。ぼんつと音がして咲良の周りに煙が立ち込める。

「咲良ー！」

俺が叫んだときに煙が段々と消えていく。消えてから見ると咲良の頭に猫の耳のようなものが、いや、猫の耳があった。

「咲良？」

「その耳……」

「え？どうかした？」

俺は鏡を渡し、咲良自信を見せる。しばらく見ていた咲良は鏡を落として叫んだ。

「えええっー！」

状況が整理できた時にはもう20時半を過ぎていた。

「要するにあの注射器で射たれた薬がまだ残ってて、それが猫耳ができてしまう薬だった。と」

「たぶんそうだと思う。」

かわいいけどちよつと問題だ。残っていると外に出るときどうするか悩んでくる。

「まあ、何もなくてよかったよ。俺は自分の部屋にいるから、何かあったら呼んでくれ」

「分かった。ありがとう、お兄ちゃん」

俺は部屋に戻るとすぐに眠ってしまった。今日は異常に疲れたし、眠い。

翌日朝7時、俺は家からバイクを走らせて込込駅に向かう。7時半集合だから30分前はずだ。さすがにいないだろうと思いつながらバイクを走らせる。

2分くらいで着くが、これから多分遠出するからバイクで来た。駅のロータリーに入るとミサに似ている女性1人を周りの男3人が責めていた。「どうせ男もいないだろ」とか聞こえて、俺は怒りを持った。

俺はバイクを男と女性の間止まるようにしてバイクを止める。

「ああ？何だ貴様——」

俺は聞く気もなく一言いった。

「俺の彼女になにやってるんだ？」

彼女のつもりもないが俺はこの場を逃げ出すために言った。

「ちえっ、男いたのかよ・・・」

と言って男3人は歩いていった。

「ミサだよね？間違ってたらごめん」

「あれ、柊くん？」

どうやら合っていたらしい。

「そう。遅かったかな」

「ううん。それより彼女って？」

「あっ、いや、咄嗟に出たから」

「ありがとう。」

ミサが可愛く小声で言った。

## 第7話 彼女

「ありがとう。」

ミサが小さく言った。

「柊くん、仮想世界とは違うの?」

仮想世界は名前の通り仮想空間。こっちはリアル。現実だ。

「急にどうした、ミサ」

「仮想世界では柊くん、私に興味無いのかなって」

確かに俺は仮想世界では1からやり方などを教えていた。一方リアルでは特に何も教えることはない。だから興味がないと思っただのだろう。

「そんなことないよ。現実には現実で教えるさ」

「そっか。じゃあ、どこ行く?」

「どこか行きたい所でいいよ」

「えーつと、キャンプとか?」

別にいいが用意はしてきていない。ミサはしてきてるかもしれないが俺はしていない。

「用意してるのか——」

「うん!」

即答だった。やっぱりやりたいうって言うのなら準備はしてるか。

「じゃあちよつと用意してくるけど、ミサ、来てくれ」

「ん?なんで?」

「さつきみたいにナンパいたら嫌だからな」

ここら辺はナンパは確かに少ないが、さつきのことがあるから念のためだ。

家でキャンプの準備をして、家から2時間バイクで走ったところにある郊外に向かう。山が近くにあり、川がきれいに流れている。川岸は砂利ではなく、砂浜のようになっていて、森が川を囲んでいる。

「ここに来たかったのか」

「うん。落ち着いたところに行ってみたくて」

都会とはかけ離れた場所で、鳥のさえずりと川の音しか聞こえない

い。

「じゃあテント貼ろうか。えっと、焚き火はどうする」

「折角だし拾ってこよ！」

役割分担は各自で行われた。俺がテント、ミサが焚き火の薪拾いだ。

俺がテントを貼っていると、たてていた枝の上に鳥が1匹乗ってきて、俺に「ピー」と鳴いてみせた。歌っているようで心が癒される。鳴き声を聞きながらやっているとき、すぐに終わった気がした。俺は枝の上に乗っている鳥に指を差し出し、指にのせる。そしてテントの中へ。

「かわいいな。」

「ピーピー！」

すっかり安心して乗っている人差し指とは別の親指に顔をすり付ける。

「名前は・・・ピヨ！」

相変わらずのセンス。あとでミサに聞くか。

「柊くん！薪拾ってきたよ！」

「お疲れ様。横になったらどうだ」

「うん。あれ、この鳥は？」

「さつき懐いた。名前つけてくれ」

ミサはしばらく考えたあと、「ピヨ！」と言った。やっぱり俺と同じネーミングセンス。

「やっぱりか。」

「なんか期待してなかった？」

「いや！俺と同じだったから」

「ピー！」

ピヨも鳴く。なんか意気投合してる。

枝で鳥かごを作り、俺とミサはテントに横になる。

「そういえばさ、仮想世界のアプリ知ってるか」

「ああ、今いる場所と同じとこにできるやつね」

「そう。だから——」

そのとき、電話がなり、すぐに俺は出る。咲良だった。

「もしもし、咲良。どうした」

《周りの空が赤いんだけど》

俺は空を見上げる。真上は真っ青だが、少し家の方を見るとそこだけ赤くなっていた。

「なんか他には」

《周りは誰もいない。》

「わかった。家の中転移するから待ってて」

俺は電話を切り、ミサを呼ぶ。

「ミサ、今から家に戻る」

「どうして?」

「家の空が赤いらしい。」

「わかった。」

『転移!HOME!』

第一長編作品 第8話 最終話 赤い空

俺たちが転移したときは咲良、あきより暁依共にリビング、じしつ自室にはいなかった。となると、寝室しかないと思い、俺は寝室のある2階への階段を上り始める。ミサもあとに続いてやってくる。

2階の通路が見えた途端、左から右へ向かう人影があった。顔までは確認できなかったが、身長から見ておそらく暁依だろう。

俺は2階に足を踏み入れる。そのとき、横からドンと俺にぶつかったなにかがあった。物ではなく、暖かみのあるなにかだ。

「ごめん！暁依！って、お兄ちゃん!？」

ぶつかったのは咲良だった。怪我はしていなさそうだが、なにか焦っている。

「どうしたんだ」

下を見ると銃のようなものを持っていた。その銃はかなり細長く、狙撃用っぽかった。

「咲良、銃なんか持ってどうした」

「あそこに私たちが狙ってる人たちがいるの!」

窓の外を見ると確かにこちらに銃口を向けている人が2人ほどいた。

「あいつら、なにしてんだ」

「なんか調べたら殺人グループの一員とかいってるよ」

殺人グループの一員か。

俺は1人心当たりがあった。今から8年前の女。自分から殺し屋だとか言っていて怪しかった。8年前は15歳でまだ中学3年だった。だからかあまり興味はなかったが、その女に百合花と俺の関係を切られた。「貸せ」とたった2文字の言葉を言い、咲良から銃を奪う。「お兄ちゃん、なにをするの」

咲良から聞かれるが今の俺には関係ないことだ。

「死ね」

俺は2人のうち1人に銃弾を当てようとする。引き金を引き、弾が飛んでいく。しかし俺の弾は相手の目の前で消える。

「なんで……」

よく見るとそこには薄い防御魔法（シールド魔法）があった。例え色が薄くても、威力はかなり強い方。余裕で銃弾くらい消せる。

すると相手は爆発火炎魔法を使う。俺は覚えているなかの最大防御魔法を使う。

「ぐっ！」

思いつきり弾き飛ばされてしまう。弾き飛ばされた俺は階段の端にある小さな壁に強くぶつかる。

「柊くん！」

「お兄ちゃん！」

それぞれ同時に言う。俺は立てないまま倒れ込んでいた。背中が痛く、苦しい気もする。そこに、ミサが

「私がやる」

と言いつ出した。俺が吹き飛ばされたから危険だとは思ったが、仮想世界のことを思い出した。ボスを1撃で殺したんだ。

「任せたぞっ」

俺は苦しいからか咳き込む。やっぱりミサに任せるしかなかったんだ。

ミサは銃を持ち、30秒で狙いを定めたあと、引き金を引く。倒れ込んでるから殺したかは分からない。ちゃんと殺せただろうか。

しかしそんな心配はいらなかった。

「殺したよ」

俺の安心する声が出た。その返事を待ってたよ。

「ありがと、ミサ」

しかし前1人を殺しただけ。まだ1人残っている。そこに暁依が来て「もう1人殺したさ」と言った。これで周りは安全だから外に出てもいいんだが、まだ俺の体がダメだった。

「一回下降りようか」

俺は必死で立ち、1階に向かう。窓からは真っ赤な空が写っていた。部屋も赤く染まっている。

「回復魔法かけるな」

暁依が回復してくれる。

「魔法使えたのか、暁依」

前までは使えないかと思っていた暁依が使えたのだ。

「まあな。少しは使える」

「すごいな。もう俺もたてるよ」

俺は銃を念のため持って外に出る。外では銃声や爆発音がそこらじゅうから聞こえてくる。いつの間にか戦場と化していたのだ。

「一回駅に向かおう。仲間がいるはずだ」

俺たちは走って駅に向かう。

向かっている最中も銃を持った住民がたくさんいた。やはりあの殺し屋はこのまちにいるんだ。

駅に着くと人が何人もいた。避難している人や銃を持った人もいる。その中に百合花たち4人もいた。

「柊くん、来てたんだ」

「ついさっきな。」

そのとき、大きな声がして防衛線が引かれた。戦闘力のある人が40人ほど列を作り、通れないようにしているのだ。

「こっちも線路から狙撃して協力しよう」

『はい！』

俺を含めた7人はホームに向かう階段を上がる。ホームに着くと線路に下り、銃を構える。

「あそこにいるの敵だよね？」

「ああ。撃て」

6人一斉に撃つ。俺は下にいる人に向かってグツジョブのサインをする。

「なるべく防衛線より前で殺せ。」

「柊くんはどうするの」

「反対側だ。」

俺は反対側に防衛線が無いためそっちを重点的に守る。あの女はまだいないらしい。

「柊くん、なんか集団来たよ！」

そう言ったのは紗由理だった。こつちにも集団が来ていた。

「そつちはそつちでやってくれ。」

俺は反対側の集団を撃退する。50人は軽くいる。下手したら100人いるだろう。

「柊くん！無理だよ！」

「諦めるな！少しでも倒せ！」

俺はグレネードを投げ、下で爆発させる。

「こつちは大丈夫だ。そつちはまだか」

百合花たちの方向はグレネードを投げられない。防衛線の人を爆発させてしまう。

「少しは減ったけど、まだ全然いるよ」

俺は下を見るが俺がいた方の倍はいる。結構多い。

「少しでも減らそう。」

俺はひたすら撃つ。味方に当たらないようにして慎重かつ大胆に撃つ。

「よし、あと半分！」

15分くらいの激闘の結果、全滅できた。赤い空はなおらないが、来る敵の数は減った。

「よし、下に降りよう。家に帰るぞ」

俺たちは家に帰る。一回安全になった今がチャンスだ。

家に着くとひとまずご飯を食べる。

「百合花、まだあの女が」

「わかってる。多分、ここにいればいずれか来る。」

あの女がこの町を支配してるに違いない。俺はここで待つことにした。

そしてそのときが来た。

ピンポーン

と呼び鈴の音。最初はただの来客だと思い、何も持たずにドアを開けた。

「久しぶりね。月島柊くん」

あの女だった。俺は口を開けたまま話を聞いていた。息をする間

もない。そしてそのまま首を掴まれ、首を絞められる。

「ぐはっ」

俺は血を吐くかのように咳をする。それを聞いてミサと咲良、百合花が来てしまう。

『柊くん！』

俺は来るのを止めるために言う。

「来るな！死ぬぞー！」

「っ！」

百合花も気づいたそうので部屋に向かう。俺には近づかない方がいいんだ。

「さーて、もう死ぬ時間ね。最後の言葉は」

「もう少し生きたかったな」

そういうと女はナイフを首に近づける。俺は初めて命の危機を感じた。もう死ぬんだ。最後まで、誰かと結婚していたかったな。

そう思っていると、ナイフが急に俺の首から離れた。それと同時に俺は床に落ちる。横を見ると拳銃を持った百合花がいた。

「百合花！」

「柊くん、私がないと何もやれないんだから！」

「ごめん、百合花」

俺は自分の未熟さに謝った。

「別に、私がついていくから」

百合花がニコツと笑っていった。俺は百合花が投げた拳銃を持ち、女に銃口を向ける。

「今度はこっちのターンだ」

俺は早速引き金を引く。そりゃあ最初は避けられる。俺はすぐに魔法を使う。火炎魔法だ。この魔法は、咲良、咲希、有希、紗由理などの思いを込めた魔法だ。そう簡単には消えない、1番強い魔法だ。

「俺たちの関係を切りやがって」

俺はそう言いながら火炎魔法を使い続ける。

「私に逆らうな！お前1人にくらい、勝てるに決まってる！」

誰も1人で勝つなんて言っていない。俺には1番大事な、大切な仲

間がいる。

「百合花！」

仲間全員で勝つんだ。

「たああつー！」

俺に仲間がいてよかった。俺は改めてそう思った。仲間がいなければ、ここまでこれていなかったから。

1週間たったとき、俺たちは転移前に来ていた川岸に来ていた。

「終くんこんなところ来てたんだあ」

紗由理が言った。やっぱり羨ましかったか。

「そうだよ。いまは思う存分楽しもうな」

「ああつ、それ私が食べたかったやつ！」

咲良が言った。焚き火にあったマシユマロを食べたかったのだから。

「だったら私が食べる」

咲希だ。やっぱり落ち着いている。

「ずるいよー」

「終くん、行く？」

百合花がいった。暑くもなく寒くもない、穏やかな天気でキャンプ日和だった。

「私もいくー！」

ミサもピヨをつれてついてきた。

「だったらみんな写真撮ろうぜ！」

晁依が提案した。

「いいな！撮ろうぜ」

ギジルもここにはいた。俺たちは川を背景にして集合写真を撮る。

「じゃあ撮るぞー」

俺はカメラを覗く。

「終くんも早く来てねー！」

「分かった。いくぞー、はい、チーズ」

俺は走って真ん中に行く。

カシャツ

シャツターになる。多分よく撮れただろう。

空は青くなり、暖かくなった。あのときとは真逆だ。結婚はまだしていなくて、またデートからだ。

けどある程度候補はある。それは・・・

Y U・・・